

2022年度国内施設視察会

参加人数を制限し、2年ぶりに開催

日本自動車研究所「つくば研究所」を訪問

「環境」「安全」「自動運転」を視察テーマに 衝突実験場や特異環境試験場などを見学

多種多様なダミー人形と記念撮影をする参加者の皆さん

日 本自動車会議所は11月9日、新型コロナウイルス感染拡大の影響で実施が見送られてきた国内施設視察会をおよそ2年ぶりに開催しました。今回訪問したのは、自動車技術の基礎的な調査・研究・技術開発および試験・評価を行う総合機関、日本自動車研究所（以下、JARI）つくば研究所。「環境」「安全」「自動運転」を視察テーマに、電動システム棟・大型ディーゼル棟・衝突実験場・特異環境試験場などの関連施設を見学しました。感染拡大防止の観点から、今回は参加人数を制限して開催。全国の会員団体・企業から19名が参加しました。

つくばエクスプレス研究学園駅に集合した一行は、駅から程近い、つくば研究所北門に徒歩にて移動後、研究所内をマイクロバスにて本館会議室に向かいました。

会議室ではまず、主催者を代表し当会議所の畠山常務理事が、「JARI様から多大なご協力をいただき、本日の視察会が実現しました」とお礼の言葉を述べた後、JARIの鎌田実所長が挨拶しました。鎌田所長は、「谷田部のテストコースと言われたメインのテストコースは、2005年のつくばエクスプレス線開業に伴い50kmほど先の城里町に移転しました。ここつくば研究所は衝突実験場やエンジン・モーターなどの評価施設、自動運転関連施設などがあり、これからその中のいくつかをご覧ください。今日一日、有意義に過ごしていただければと思います」と参加者に歓迎の言葉を述べられました。

続いて、企画・管理部の赤井泉明部長がJARIの

事業概要を説明。その後、城里テストセンターの中谷有センター長が城里テストセンターの施設や設備の概要を説明しました。その後、昼食をはさみ、一行は2グループに別れ、各視察施設へと向かいました。

「環境」関連施設では、電動システム棟内でマイナス40℃～150℃までの温度条件下でモーター試験が可能な大型モーターダイナモメーターや、自動車へのワイヤレス給電の研究設備などを見学し、電動車両に関する研究・試験を実施するとともにその研究成果の標準化を実施しているとのことでした。大型ディーゼル棟では上り坂、下り坂を再現できる低濃度大型シャシダイナモメーターや、排ガス中に含まれるSOx、NOx、粒子状物質、ごく微量のベンゼンやトルエンなどを測定する装置を見学し、自動車による環境への影響を包括的に研究することで環境負荷の低減を目指しているとの説明を受けました。

その後、2グループが合流し「安全」関連施設である衝突実験場を見学しました。ここでは、安全性評価試験のみならず、評価試験法の研究のための事故再現実験、事故鑑定の技術研修などを実施していることなど多岐にわたる事業展開の説明を受けました。また、ダミー人形を整備するためのダミー室には、人体の傷害評価に用いる男性・女性・子供の様々なサイズのダミー人形があり、最近では、コンピューターシミュレーション技術を活用した傷害発生メカニズムの解明や性別、年齢、体格の違いを考慮した評価試験法を研究することで、交通事故によ

る被害の軽減に寄与しているとの説明がありました。

また、「自動運転」関連施設として、Jtownの特異環境試験場を見学。この施設では周囲の明るさ、霧や降雨、逆光状態などの様々な天候条件をつくり出し、信号灯や標識、歩行者を認識するセンサーの性能評価ができることから、海外からの注目度も高いとのこと、実際に霧や降雨を体験しました。JARIではこのような設備を使用しながら、将来の

自動運転車の性能評価法の整備に取り組み、自動運転技術の向上を目指しているとのこと。

最後に質疑応答の後、視察会は終了しました。

今回視察会では、それぞれの担当者から研究の意義や施設・設備に関して詳細な説明を受け、参加者からは「とても貴重な体験をさせていただきました」などの感想が聞かれました。ご協力いただきましたJARIの関係者の皆さまに心よりお礼申し上げます。



日本自動車会議所は9月13日、東京都港区の日本自動車会館で第285回会員研修会を開催しました。会場では新型コロナウイルス感染対策を引き続き実施、リモート配信も併用し、全国から約70名に参加いただきました。今回は「危機への対処にみる日本の課題」をテーマに、講師にはインフラ政策や防災・危機管理に詳しい政策研究大学院大学客員教授で、元国土交通事務次官の徳山日出男氏をお迎えしました。



徳山 日出男氏

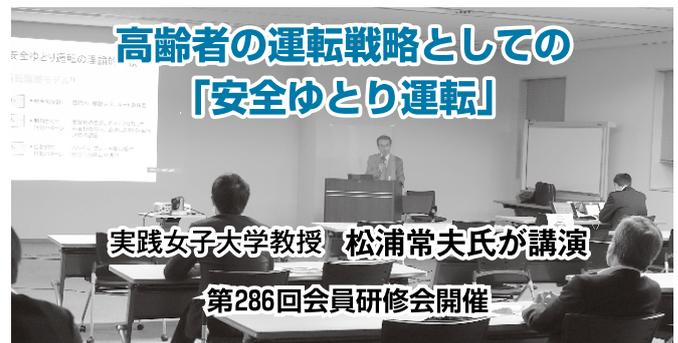
講演では、気候変動による自然災害の頻発など数多くの危機に直面する日本が抱える課題等について解説いただきました。

徳山氏は東日本大震災発生当時、国交省東北地方整備局長を務めており、その際の初動対応について緊迫した様子の動画を交えながら説明。大災害時の情報収集や指示など最初の1時間、1日間、1週間で行うべき行動が重要と指摘しつつ、100年以上前の自然災害が再び繰り返されている事例も挙げ、「震災を風化させてはならない。教訓の伝承が命を救う」などと訴えました。

加えて、将来想定される首都直下型地震なども取り上げ、「災害列島に生きるという自覚が必要。知識・備えによって災害は克服できる」と強調していました。

受講者からは「大震災はもとより、さまざまなIncident（出来事・事故・事件などの意）が起こるたびに、それを忘れず、また他の人や企業の事例・知恵も自分事化して、準備することの大切さを肝に銘じた

と思う」との意見がありました。



日本自動車会議所は10月31日、東京都港区の日本自動車会館で第286回会員研修会を開催し、交通心理学が専門の実践女子大学教授の松浦常夫氏が「高齢者の運転戦略としての『安全ゆとり運転』」をテーマに講演しました。会場では新型コロナウイルス感染対策を引き続き実施、リモート配信も併用し、全国から約60名が参加しました。



松浦 常夫氏

講演では「運転技能の低下を意識した高齢ドライバーが、以前よりゆとりを持った運転をすることで、安全運転を続けられる」とした「安全ゆとり運転」（補償運転）を提言。免許返納をしなくて済むなど運転寿命が延びる効用もあると説明しました。

具体的には①夜間走行、長距離走行等を控える「運転の制限」、②先進安全技術を備えた「サポカー」に乗るなどする「運転前の準備」、③スピードやマナー等を守る「運転時の安全志向」——を挙げました。

その上で、事故統計や走行実験、面接調査のデータを交え、高齢ドライバーは「夜間や雨天など、運転を避けることができる危険な環境下では事故が少ない」と指摘。ただ、車間距離など危険性が自覚できない高齢者については「ゆとり運転ができず、（自動車教習所などで）指導の必要性があるだろう」と強調しました。

「東京自動車三十年会記念碑」法要営む



上野・不忍池辨天堂で
先駆者の子孫・関係者ら約30人が参列

東京・上野の不忍池辨天堂境内に建立されている「東京自動車三十（みそじ）会記念碑」法要が11月17日、同辨天堂で営まれました＝写真＝。記念碑に名を刻む、自動車関連業界の先駆者の子孫・業界関係者ら約30人が参列。経営環境など厳しさが増す状況下でも果敢に挑戦し今日の発展の基礎を築いた先達の偉功を偲び、感謝の念を込め厳かに焼香しました。

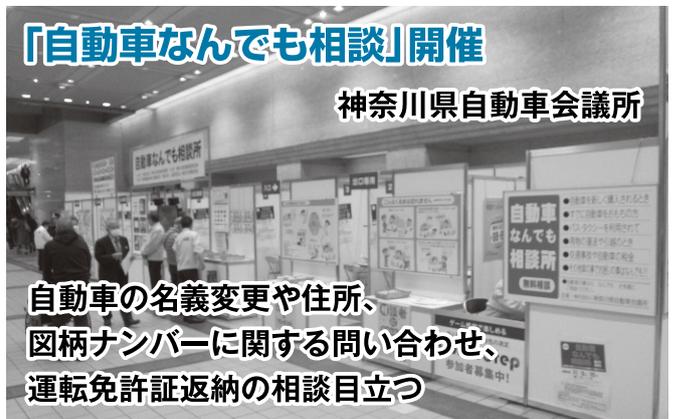
法要は、参列者の間に仕切りを設置するなど新型コロナウイルスの感染防止対策を施した中で執り行われ、北岡興真・東叡山福聚院住職が導師を務める読経に続き、参列者が焼香し滞りなく法要は終了しました。その後、実行委員長の中川雅治・東京都自動車会議所会長が挨拶に立ち、「日本の自動車産業に携わる人は約550万人にのぼります。その源流は記念碑に刻銘されている約100人の起業家たちです。自動車関連産業は100年に一度の大変革期といわれています。年に1回の法要の機会に、そうした先達の偉業に思いを馳せることで、事業発展への思いを新たにすることは大変意義深いことだと思います」と語りました。

続いて今年5月に安全自動車の中谷良平会長から世話人代表を引き継いだバンザイの柳田昌宏社長が、「私

たちの業界は、部品不足、新車販売の減少、EV化、自動運転など厳しさと激変の時期を迎えています。われわれの手で進むべき方向性を早く導き出し、魅力ある自動車関連業界を維持し、次の世代に繋げていくことが先達の思いだと感じています。本日、スピード感を持ち前へ進めていく重要性を新たにしました」と話しました。

東京自動車みそじ会は、1953年に自動車関連業界の親睦団体として発足。その時点で自動車関連事業に30年以上携わっていた人を会員としたことから、この名がつけました。来年は結成70周年となります。発足当初のメンバーを顕彰する記念碑は1975年に建立。不忍池辨天堂境内に立つ石碑の中でも威光があり、行き交う人々の目を引く存在となっています。

（東京都自動車会議所）



「自動車なんでも相談」開催
神奈川県自動車会議所
自動車の名義変更や住所、
図柄ナンバーに関する問い合わせ、
運転免許証返納の相談目立つ

神奈川県自動車会議所は11月9日、10日の両日、横浜駅東口の新都市プラザで「自動車なんでも相談所」を開設し＝写真＝、新型コロナウイルス感染防止対策を講じたうえで、自動車全般について無料で相談に応じる「自動車なんでも相談」を実施しました。

この「自動車なんでも相談」は、関東運輸局神奈川

訃 報

本田技研工業元社長
（当会議所会員元代表者）

久米 是志氏

本田技研工業元社長の久米是志（くめ・ただし）氏が9月11日、逝去されました。90歳でした。久米氏は、創業者の本田宗一郎氏から直接技術指導を受けられた自動車エンジニア。低公害・低燃費を実現した初代シビックの「CVCCエンジン」の開発にも携われ、当時、世界で最も厳しいとされた米国の環境規制を初めてクリアするなどの実績を残されました。本田技術研究所社長などを経て、1983年～1990年まで社長を務められました。



日産火災海上保険元社長
（当会議所会員元代表者）

川手 生巳也氏

日産火災海上保険（現損害保険ジャパン）元社長の川手生巳也（かわて・ふみや）氏が9月26日、逝去されました。93歳でした。川手氏は1989年～1995年まで社長を務められました。



富士火災海上保険元社長
（当会議所会員元代表者）

白井 淳二氏

富士火災海上保険（現AIG損害保険）元社長の白井淳二（しらい・じゅんじ）氏が11月11日、逝去されました。90歳でした。

運輸支局、神奈川県、横浜市消費者協会の後援を受け、1981年から継続して実施しており、今回で45回目。関東運輸局神奈川運輸支局、神奈川県くらし安全防災局、神奈川県自動車税管理事務所をはじめ関係団体から派遣された相談員延べ41名と弁護士（2日目の午後のみ）が対応にあたりました。

今年の相談件数は、昨年とほぼ同数の86件（うち電話相談は5件）でした。内訳は、登録手続き関係が29件、車検・整備関係が6件、道路交通法が15件、車の売買関係が6件、自動車税関係が6件、事故・保険関係が7件、弁護士が2件、輸送関係が5件、その他が10件となり、軽自動車を含む自動車の名義や住所の変更、図柄ナンバーに関する問い合わせ、運転免許証返納の相談が目立ちました。



静岡県自動車会議所は11月18日、2023年度税制改正に向けて、静岡市葵区の青葉通り交差点などで税制改正要望の街頭活動を行いました＝写真＝。活動には、静岡県自動車会議所、日本自動車連盟（JAF）静岡支部、日本自動車販売協会連合会静岡県支部、全日本自動車産業労働組合総連合会（自動車総連）静岡地方協議会から15名が参加。街行く人々に「みんなで考えよう！クルマの税金」と書かれた自動車税制改革フォーラム



愛知県自動車会議所は10月14日、15日の2日間、名古屋市中区の金山総合駅コンコースにおいて、国や愛

令和4年「秋の叙勲」

当会議所関係者多数が受章

令和4年秋の叙勲で、当会議所の会員団体・企業関係者多数が晴れの栄誉に輝かれました。

◇旭日重光章

・南雲 忠信氏：元横浜ゴム会長兼CEO
元当会議所評議員

◇旭日中綬章

・竹林 武一氏：日本自動車整備振興会連合会会長
三重県自動車会議所会長
当会議所副会長

・田堂 哲志氏：元日本塗料工業会会長

・長谷川康司氏：元首都高速道路会長

◇旭日双光章

・松井 國紀氏：元石川県自動車会議所副会長

・中川 進治氏：三重県自動車会議所理事

◇瑞宝中綬章

・安原 敬裕氏：関東陸運振興センター会長
当会議所監事

◇瑞宝小綬章

・細野 高弘氏：愛知県自動車会議所常務理事
元全日本トラック協会専務理事

◇瑞宝双光章

・山崎新太郎氏：元神奈川県自動車会議所理事長

のチラシを配布し、自動車諸税について知っていただくとともに、自動車ユーザーの負担軽減と公平・公正な税制の実現を訴えました。

チラシを受け取られた方からは、「自動車の税金がこんなに多いと驚きました」、「自動車にかかる税金は高いから、安くしてほしい」など負担軽減を求める声が寄せられました。なお、活動の様子は、「静岡新聞」に掲載され、県民に広く周知されました。

知県の後援を得て、今年度で15回目となる「自動車なんでも無料相談所」を開設しました＝写真＝。会場では、愛知運輸支局等の行政機関や自動車関係16団体から派遣された相談員が、43件の相談を受けました。相談内容は検査登録、自動車アセスメント、ナンバープレートに関するものが上位を占めました。

会場には、愛知運輸支局の自動車検査証電子化の広報、自動車事故対策機構の衝突実験で使用した車両の展示、自動車事故遺児の作品の展示に関するブースを設けたほか、全国版図柄入りナンバープレート、大阪・関西万博特別仕様ナンバープレート、豊田・春日井の地方版図柄入りナンバープレートの見本を展示しました